



5万分の1地質図幅の新刊

太平山

TAIHEIZAN

5万分の1地質図幅
地域地質研究報告

著者 大沢 稔・加納 博・丸山孝彦
土谷信之・伊藤雅之・平山次郎
品田正一

発行 工業技術院 地質調査所

取扱先 東京地学協会 (03)261-0809 262-1401

・本図幅地域の地質は 白亜紀及びそれ以前の太平山深成変成岩類と 緑色凝灰岩地域特有の第三系及びこれを被覆する第四系からなる。

・太平山深成変成岩類は 最古期深成変成岩類 (I期) と主侵入岩類 (II期) とに分けられ 後者は K-Ar 年代によれば後期白亜紀である。最古期深成変成岩類は 変成岩類及び片麻状角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる。

変成岩類は 捕獲岩状をなして花崗閃緑岩中にとりこまれている。主侵入岩類は角閃石黒雲母花崗閃緑岩を主とし黒雲母花崗岩を伴っている。

・第三系は 下位から大又層・萩形層・大倉又層・砂子淵層・女川層・筑紫森流紋岩・船川層・組谷峡安山岩・天徳寺層及び笹岡層に分けられる。前4者は いわゆる“緑色凝灰岩”であって それ以外は 含油第三系及び同時期の火山岩類で

ある。

・大又層は 変質輝石安山岩溶岩とその火砕岩を主とし 層厚300—700mで 秋田県男鹿半島の西男鹿層群にほぼ対比される。萩形層は (変質) 輝石安山岩溶岩とその火砕岩を主とし 堆積岩をはさんでいて 阿仁合型植物化石を産する 層厚は400—850mである 男鹿半島の広義の台島層 (宮城1958) 下半部にほぼ対比される。

・大倉又層は 黒雲母流紋岩溶結凝灰岩・安山岩溶結凝灰岩及び輝石安山岩溶岩を主とし 層厚0—500mである。砂子淵層は 大倉又層と一部同時異相であって 玄武岩溶岩及びその火砕岩を主とし 層厚300—1,000mである。本層中から貝化石及び西黒沢階の特徴種である有孔虫化石を多産する。男鹿半島の広義の台島層上半部及び西黒沢層にほぼ対比される。

・女川層は硬質頁泥岩を主とし 層厚300—600mである。船川層は 暗灰色泥岩を主とし 層厚600m以上である。

・天徳寺層はシルト岩を主とし 層厚200—500mである。

・笹岡層は 砂岩を主とし 層厚200—400mであって “大桑一万願寺動物化石群” といわれる貝化石を多産する。

・第四系は 下位から高岡層・段丘堆積物及び沖積層に分けられる。

・本図幅地域の第三系は 色々の時期に形成された断層及び褶曲が重なり 現在みられるような複雑な地質構造になっている。これらのうち 1番古い断層及び断層帯は 大又層の形成に関係したものであり 1番新しいものは 出羽変動によるものである。太平山深成変成岩類は 広義の台島階上半部の堆積時から相対的に隆起し始め 西黒沢階堆積時から女川階堆積前までの構造運動でさらに隆起し 本図幅地域北東部の大部分で後背地を形成していたと考えられる。本図幅地域内の主な断層群の形成は この頃から始まり 出羽変動によって完成したと考えられる。

・西隣の秋田図幅が1977年に出版されており 両図幅地域とも東北地方緑色凝灰岩地域の標式地であるので 合せよまれると地質について より理解し易いであろう。

地質ニュース

第323号 7月号

定価 ¥ 540 千実費

発行

工業技術院 地質調査所

林 久 雄

株式会社 家業公報社

東京都千代田区九段南4の2の12

TeL. (03)265-0951 (代表)

振替口座 東京 32466

大蔵省印刷局 政府刊行物仕入部

東京都港区赤坂葵町2

TeL. (03)582-4866

昭和56年7月1日

編集

発行人

発行及

印刷

総発売元